

都賀庭鐘『過目抄』考

稲田 篤信

—

『過目抄』（半紙本全十三冊。天理大学附属天理図書館蔵）は近世中期大坂の文人都賀庭鐘の漢籍読書抄記として知られる。小稿ではこれまでの研究をふまえて、抄記をする際に、庭鐘が当時として手近に置いて披見可能であった漢籍はどのようなものだったのか、庭鐘の読書環境をうかがい、近世中期上方人文社会の漢籍受容の一端を少しでも明らかにしてみたい。^①

『拙古堂日纂』（三十九冊。大阪府立中之島図書館蔵）・『拙古堂雜抄』（十二冊。国立国会図書館蔵）は、明和から享和にかけてのほぼ三十年間に作られた同じく大坂の儒者奥田松齋の漢籍抄記である。本書も漢籍受容の資料として『過目抄』同様有益である。以下、適宜『過目抄』抄出の書に『拙古堂日纂』と『拙古堂雜抄』の関連記事を船載と読書の目安として併記する。^②

二

『過目抄』は本来十四冊あったものらしく、第一冊が失われて、残存の最初の冊（これを第二冊として以下を数え上げていく）の外題が「過目抄 貳 丹鉛総録抄」となっている。このように、庭鐘は各冊の表紙外題や見返し、内表紙に抄出書目を書き上げている。

第二冊は楊慎『丹鉛総録』からの抄出である。本文一丁表には巻首題「丹鉛総録」を記し、その題下に「博南山升庵楊慎用修著集／滇南心泉梁佐応台校刊」と記す。続いて「卷一之二」の「天文類」、「地理類」から「卷二十五之二十七」の「瓊語類」まで二十八の類題を掲げ、さらに「序 嘉靖壬寅閏夏五金伏之初楊慎序^{中欠}」、「同 嘉靖三十三年甲寅五月五日吉〇^{中欠}賜進士出身奉政大夫福建按察司僉奉〇勅整飭兵備前兵部員外郎滇南門人梁佐応台拜書^{全三丁}」の二序の年号と序者名を記す。楊慎序の嘉靖壬寅は十八年（一四八二）、梁応台序の嘉靖三十三年甲寅はわが国天文二十三年（一五五四）。庭鐘は嘉靖三十三年梁佐（応台）編刻二十七卷十冊本を披見したものと推定される。また、庭鐘は他本も参照しているようで、「一本序多一篇安邑楊一魁書」と記す。⁽³⁾

楊慎は字用修、号升庵。明代有数の学者である。『丹鉛総録』二十七卷十冊は諸書から引いて、天地造化から古今世運、人物制度、文章俗好、方言、鳥獸草木に至るまで二十八類に分け、博引考証した楊慎の代表作である。庭鐘が『丹鉛総録』から抄出した文章は、すでに翻刻をしているので、詳細はそちらに譲りたい。⁽⁴⁾

奥田松斎『拙古堂日纂』は、天明三年（一七八三）癸卯正月二十四日の日付で、二十七卷十冊本を写している。

三

『過目抄』第三冊は陳繼儒『尚白齋秘笈』からの抄出である。外題に「過目抄 參 尚白齋秘笈」、見返しに「尚白齋秘笈／尚白齋秘笈序 陳万言／鐫眉公秘笈序 沈徳先／二十種本七以下／刻尚白齋秘笈序 姚士麟叔祥／叙眉公先生秘笈 門人 李日華撰」とある。

『尚白齋秘笈』は別名『宝顔堂秘笈』。宮内庁書陵部蔵『舶載書目』には、「延享二乙丑年二番船持渡」書の一つ「尚白齋陳眉公秘笈」として、「自見聞録至読書鏡十六種ハ皆自ノ選書ナリ。計五套。自玉照新志至考槃余事二十種ハ梁宋遼元明諸儒ノ選書ノカクレタルヲ得テ午ラ校訂シテ刊行スル書ナリ。計五套」と記し、続函目録を含めた五十帙の所収書目を掲げる。⁵⁾ 庭鐘は『眉公見聞録』から『宝顔堂増訂読書鏡』までの十六種を収録する明万曆刊『尚白齋鐫陳眉公宝顔堂秘笈』と、『玉照新志』から『考槃余事』までの二十種を収録する万曆三十四年刊『尚白齋鐫陳眉公訂正秘笈』の両方を見ているようである。陳万言、沈徳先、麟叔祥、李日華の名も二種の序者の名を拾って記したものであろう。文房四宝を始めとした文人趣味の書として名高い屠隆『考槃余事』の記事が多いのが印象的である。

陳繼儒は字仲醇、号眉公。明末の文人として董其昌にらんで日本近世の文人にも名がよく知られていた人物である。本冊についても既に翻刻をしているので、詳細はそちらに譲りたい。⁶⁾

四

『過目抄』第四冊は徐渤の筆記『徐氏筆精』からの抄出である。外題は「過目抄 四 徐氏筆精^{詩人 土地 醫} 徐氏易通」。見返しは「筆精略抄 易通」。『徐氏易通』は『筆精』の巻二にあたる。本冊の二十四丁目に「徐氏易通」と記した内扉があり、それ以下に写される。『過目抄』の写した巻首題は「徐氏筆精」。その下に、「晋安徐渤興公譚輯／同里邵捷春肇復訂定／温陵黄居中明立編次」とある。国立公文書館蔵の一本(三〇七―一七〇)は八卷八冊。黄居中の序と邵捷春の序がある。

黄居中の序は崇禎四年（一六三二）である。

「詩人」、「土地」、「器」、「医」が庭鐘の関心のありかを示している。例えば庭鐘は二十一丁裏から二十二丁表までを用いて、巻六「詩話 詞品 文訂 字正解 事物解」の「長吉詩用事」を全文写し、圈点を施している。李賀の詩は新奇で、字面をかえる用字があるとして、実例を挙げた条である。庭鐘はこれに、一、用いてよしとするもの、二、用いてもよく、珍しいもの、三、意味の通じるもの、四、意味の通じないもの、の四通りの評価を加点（無点）で区別している。このように同書は詩文の記事に特色があるように思われるが、『四庫全書総目提要』（子部雜家類三、以下『四庫提要』）は、その見識の無知を数え上げ、「明人恣縦之習」とはなはだ厳しい。

奥田松斎『拙古堂日纂』には、「晋安徐渤興公撰輯。全八卷合冊。六本一帙全。」とある。

五

『過目抄』第五冊は類書を中心とした一冊である。外題は「過目抄 五 潜雀 元詩人名 酉陽雜俎 法苑珠林 耆婆經 起世經 瑯邪代醉」。内表紙には「過目抄 五 潜鶴居類書五個套抄 元詩人名 酉陽雜俎 法苑珠林耆婆經 起世經 瑯邪代醉」とある。その見返しには「潜鶴居類書第五套抄 元詩人名 酉陽雜俎 法苑珠林耆婆經 起世經 瑯邪代醉」とある。

陳仁錫『潜確類書』、顧嗣立『元詩選』、段成式『酉陽雜俎』、道世『法苑珠林』、闕名氏『起世經』、張鼎思『瑯邪代醉』から写している。『耆婆經』は安世高訳『仏説奈女耆婆經』のこと。「仏説奈女耆婆經 後漢安世高訳」として後述第十一冊末尾に写されている。

陳仁錫『潜確類書』は類書。「第五套抄」あるいは「五個套抄」とあるのは不明。巻「二十九」以下、巻「四十五」以下巻六十まで、巻「六十一」以下巻七十二、巻「七十三」以下、巻「八十五」以下巻百二までの五個所の語句とその解が写さ

れている。

奥田松斎『拙古堂日纂』には「潜確類書六帙。陳仁錫著。」とある。

「元詩人名」は、『元詩選』からの抽条。同書は清初の顧嗣立の編述。元代詩人の略伝と代表詩を収める。庭鐘は「元詩選目録」と題して、巻首の「文宗」、「順帝」の名を記し、続いて「甲集」の「元好問 字裕之 遺山集」以下、百家の詩人名と詩集の目録を作っている。所見の国立国会図書館蔵の一本（一九四―八二）の封面に「長洲顧俠君選／元百家集／秀野草堂藏板」とあり、「康熙癸酉（三十二年）嘉平月商宋犖序」がある。庭鐘は『元詩選』康熙五十九年刻本の三集を見ている。⁷ 国立国会図書館蔵『商舶載来書目』宝暦十二壬午年に一部六套の記録がある。

『西陽雜俎』二十巻は段成式の筆記。元禄十年京都井上忠兵衛他刊の和刻本は、明末清初の常熟毛晋汲古閣本の覆刻である。庭鐘は唐本・和刻本のいずれかを利用した可能性もあるが、おそらく『説郛』を見たのではないかと思われる。『法苑珠林』、『起世経』は、実際に庭鐘が披見した本の書誌に関する記載を欠く。陶宗儀『説郛』（『説郛続』）からの抄出であろう。

『瑯邪代醉編』は、張鼎思撰の類書。万暦二十五年序刻本の和刻本もあり、わが国でも広く読まれ、浮世草子など小説にも利用されていることはすでに指摘がある。⁸ 本冊には、「瑯邪代醉編記要」と題して、寛延元年（一七四八）戊辰の七月二十七日、上京した庭鐘が香川修庵の一本堂に宿って『瑯邪代醉編』を抄記した旨の記事がある。本条はすでに庭鐘伝の一齣として諸家に注意されている。⁹ 庭鐘は「脚患」を発こし、痛み行歩に堪へず、五、六日療養したその旅中の無聊を慰めるため、香川南洋に請い、『瑯邪代醉編』を読んだ。しかし広巻眼及ばず、ただ一斑を視るのみで、眼に入る数語を取って収録し、一時の備忘とした、という。庭鐘は四十巻の「広巻」から抽条して、巻一「日月」の「山海経述海外之山詳也」以下の文章（提要）、約三十条を記す。数語とはこれを用いのであろう。

六

『過目抄』第六冊は『鴻苞集』からの抄出と、「符略」、「印制類聚」、「説異抄」と題して、テーマ別に各書から写した記事を集めている。「印制類聚」、「説異抄」に付せられた「得るに随つて抄を加ふ」の但し書きが本冊の成立事情を語っている。外題は「過目抄 六 鴻苞集 符略玉露 筆乘 野客 説類 印制類聚備齋 幽怪 清異」。内表紙には「過目抄 鴻苞集抄 符略玉露 筆乘 野客 説類 印制類聚備齋 幽怪 清異」とある。

『鴻苞集』は明の屠隆の文集。本文一丁表の内扉に「鴻苞集」と巻首題を記し、その下に「卷 黄汝亨序 鴻苞居士伝 友人張応文成叔甫撰」とある。屠隆は字長卿、号赤水。所見の国立公文書館蔵本（三〇七―七九）は「享和壬戌」の新収印のある昌平坂学問所旧蔵本。四十八卷二十四冊本。「庚戌春二月寓甫居士黄汝亨書於玉岑山下」序と鴻苞居士伝がある。巻首題下に、「明東海屠隆緯真著／西呉茅元儀公選訂／松陵李嘉元孔彰校」とある。庭鐘の見たのも四十八巻本。庭鐘は巻首題下に、「卑家本の脱失、卷の二より十二まで、三十二より四十六までの際抄書す」と記す。また、『鴻苞集』抄出の最後に「家蔵本脱失の所、他家本に因て抄書を卒業す。此に至り眼光朦朧、字行不正、初老の境介嘆息に堪へず。甲申十二月灯火記」と経緯を述べて、眼の衰えを嘆いている。¹⁰ 甲申は明和元年（一七六四）、庭鐘四十七歳である。

「符略」の部分は羅大経『鶴林玉露』、焦竑『焦氏筆乘』、王楙『野客叢書』、葉向高『説類』からの抄出で成り立っている。

「印制類聚」の部分は楊慎『丹鉛総録』、沈括『夢溪筆談』、洪邁『俗考』、陳子兼『窓間記聞』、文谷『備忘小抄』、『郷談正音』、『徐氏筆精』からの抄出で成り立っている。

「説異抄」では、袁棟『書隱叢説』、成俔『慵齋叢話』、劉敬叔『異苑』、劉義敬『幽明録』、牛僧孺『幽怪録』、馮贄『雲仙雜記』、戴孚『広異記』、宋聶『徂異記』、歐陽玄『睽車記』、陶穀『清異録』、闕名氏『玄池説林』、顧昉『海槎余録』、陸深

『蜀都雜抄』、慎蒙『貴陽山泉志』、闕名氏『採蘭雜志』、林坤『誠齋雜記』、闕名氏『嘉蓮燕語』、闕名氏『戊辰雜抄』、闕名氏『下帷短牒』、闕名氏『致虛雜俎』、陳芬『芸窓私志』、姚寬『姚氏殘語』、蔣穎叔『蔣氏日録』、王穉登『虎苑』、徐渭『徐文長秘集』、馮夢龍『智囊』、倪綰『群談採余』から抽条する。

『丹鉛総録』、『夢溪筆談』、『郷談正音』、『徐氏筆精』、『書隱叢説』、『慵齋叢話』など以外はおおむね『説郛』から引いていると推定されるが、一概に決めることができない。

七

第七冊は『説鈴』、史書、『書隱叢説』からの抄出である。外題は「過目抄 七 説鈴 読史考 袁棟人名」。内表紙、同見返しには「説鈴 読史考抄 袁棟人名考」とある。

『説鈴』は呉震方の叢書。康熙四十四年序刻本は二十六冊本。前後集に王士禎『分甘余話』、高士奇『天祿識余』、周亮工『閩小記』、顧炎武『京東考古録』、余懷『板橋雜記』など諸名家の地誌を収める。『商舶載來書目』（国立国会図書館蔵）享保十七壬子年に一部二套の記録がある。

庭鐘は周亮工『閩小記』のほか、虞兆澐『天香樓偶得』、陳琰『曠園雜志』、呂種玉『言鯖』、震方『嶺南雜記』、王崇簡『冬夜箋記』、王士禎『隴蜀余聞』などから抽条している。

「読史考抄（「読史考略抄数条」とも）」は、洪武六年から崇禎元年までの記事を抄出している。崇禎元年は「九月、海寇鄭、芝龍巡撫熊文燦に降る」の記事から始まる。鄭成功をはじめとする海外情報への関心から作られた略抄であろう。

松斎の『拙古堂日纂』には、「説鈴 全三十八冊。前後続三集。二帙。」とある。松斎友人の森川竹窓の読書抄記『古香齋筆記』（龍谷大学図書館蔵。全七十冊）第二冊（卷廿九、内題「丙辰漫録」）には、「説鈴ノ内」と注記して高士奇『天祿識

余」が引かれている。竹窓寛政八年（一七九六）の読書である。また沢田一斎（風月庄左衛門）の『奚疑斎藏書』全四冊（国立国会図書館蔵）も同様の読書抄記であるが、その第四冊に『説鈴』が引かれる。

『書隠叢説』の著者袁棟は袁漫恬。棟は名。先世は松江の巨族で、呉江の人という（『国朝画識』卷十二）。画人として名が残るが詳細は不明。庭鐘はこの書を次の第八冊、および第十二冊でも写している。『書隠叢説』については後述。

八

第八冊は全冊袁棟の筆記『書隠叢説』からの抄出である。外題は「過目抄 八 書隠叢説」。本文一丁表冒頭に「呉江袁漫恬著 書隠叢説 鋤経楼藏板」とある。国立公文書館蔵の一本は十九卷八冊本（子〇七五―六）。その封面にこの通りある。続けて庭鐘は「乾隆戊辰（十三）冬十月望日長洲沈徳潜題於澄懷園中」の全文を写し、「〇序琴川陳祖范拜稿」（乾隆己巳年立夏日）、「〇序同学弟阮学濬書於華嚴僧舍」、「〇同学弟蔡寅斗拜手書」（乾隆九年）、および「〇自序乾隆九年甲子暮春書隠楼主人漫恬袁棟自序」と四序の年号と序者名を記す。乾隆己巳十四年はわが国の寛延二年（一七四九）。『英草紙』刊行の年である。『商舶載来書目』（国立国会図書館蔵）宝暦十庚申年に一部一套の記録がある。新渡の舶載書であったこととなる。

奥田松斎『拙古堂日纂』は、「呉江袁棟漫恬著。乾隆九年甲子暮春書隠楼主人漫恬袁棟自序。乾隆戊辰沈徳潜跋於澄懷園中」とあり、「一帙八卷八冊」本を写している。あるいは庭鐘と松斎は同じものを見たのかも知れない。

九

第九冊は庭鐘の地誌や俗語小説への関心を示した一冊である。外題は「過目抄 九 広東新語酒油 自獻虫魚草木 天基奇言 小

説五序夷堅志序 歡喜冤家序 万尊師伝出啓植野集」。

『広東新語』二十八巻は、屈大均の筆記。広東地方の天文地理、経済物産、人物風俗を巻一「天語」から巻二十八「怪語」までの二十八巻に八六九項目を分かち述べたもの。屈大均（一六三〇—一九六）は広東番禺の人。明末清初に生きたいわゆる明の遺民である。庭鐘は「酒」以下「魚草木」の各類を抄記している。庭鐘が見た本は分らないが、「広東新語 番禺 屈大均翁山撰」とある内題は自序を写したのであろう。庭鐘には名物の書『閩書南産志』の校刊があり、中国南方の物産について興味があった。¹¹⁾

『天基奇言』は未詳。庭鐘は「伝家宝」と書名を記し、その下に「揚州石成金天基集」と記すが、所見の『伝家宝』（国立公文書館蔵本（三〇八—二九）。乾隆四年自序。木村兼葭堂旧蔵本。四集校刊各集五冊全二十冊）には、「天基遺言」、「天基狂言」などの書名があるものの、「天基奇言」はみあたらない。『伝家宝』は生活百科的教訓勸善書の集成であるから、『天基奇言』もそれに類した著作であろう。沢田一斎『奚疑斎蔵書』第二冊に『伝家宝』が引かれる。

『夷堅志』は洪邁の志怪小説。庭鐘の引く「夷堅志旧序」は嘉靖二十五年正月の田汝成序と「伯敬鐘惺題并書」の引である。奥田松斎は『拙古堂日算』に「宋洪邁夷堅志。十本全。五十巻。錢塘田汝成。鐘伯敬。二人序文」の本を写している。これも庭鐘と松斎は、同じ本を見たのであろうか。『新訂増補夷堅志』明武林讀書坊刊八冊本（蓬左文庫蔵本）には鐘惺増評があるというが、未見。

「小説五序」とあるのは、『小説選言』、『幻縁奇遇』、『石點頭』、『拍案驚奇』、『歡喜冤家』の五作品の序のことである。いずれも白話小説の序文である。

「今古奇観序」は所引の序題下に「△乾隆乙丑重鐫墨憨齋手定今古奇観植桂楼蔵板」とある。また序末に「姑蘇笑花老人」とあるので、併せて大塚秀高『増補中国通俗小説書目』¹²⁾（以下大塚目）所掲の乾隆十年刊、無窮会平沼文庫本十一巻と

同じ本が庭鐘の引いた本であろう。

「小説選言叙」は、所引の序末に「青雲居士題於聽月齋」とある。大塚目に「小説選言十八卷十八篇」を掲出して佐伯文庫蔵本を指摘し、三言二拍からの選出であるという。梅木幸吉『佐伯文庫の蔵書目』には、「拾遺」の部に「小説選言十八卷五冊明青雲主人」の一本を著録する。また梅木幸吉『佐伯文庫の残存本』には、明青雲主人評趙凡士校、明末雄飛館刊、「縦十センチ、横十二センチの図入り袖珍本」という。¹³⁾

「幻縁奇遇叙」は所引の序末に「搦今生題于窓湖小舫」とある。孫楷第『中国通俗小説書目』(以下孫目)に「幻縁奇遇小説」として掲出し、刊本未見として、大連図書館の抄本を挙げ、秋水園主人『小説字彙』の引書に名が出るという。大塚目は作者を「撮合生」とするが、庭鐘は「撮合」を「撮今」に作る。大塚目は佐伯文庫本を挙げる。梅木幸吉『佐伯文庫の蔵書目』には、「拾遺」の部に「十二卷八冊」本を著録する。また梅木幸吉『佐伯文庫の残存本』には、清撮合生編、清初愛月軒刊、「縦十二センチ、横八・五センチの袖珍本」、封面に「新刻醒世小説、幼縁奇偶」とある十二回の短編小説であると記す。¹⁵⁾

「石点頭叙」は所引の序末に「古呉龍子猶撰」とある。孫目は「石点頭十四卷」を掲げて、葉敬池梓本ほかを挙げ、最初に龍子猶(馮夢龍)の序があると記す。大塚目は内外の三十種あまりの伝本を指摘する。庭鐘の見た本は不明。

「拍案驚奇序」は所引の序題下に、「姑蘇原本 消閑居精刊」とあり。序末に「即空觀主人題於浮樽」とある。大塚目は封面に「姑蘇原本／繡像拍案驚奇／消閑居精刊」とある京都大学文学部蔵三十六卷本を挙げる。国立公文書館蔵の一本(三〇九―三四)には、封面が「姑蘇原本／袖珍拍案驚奇／消閑居精刊」とある。こうした「消閑居」刊本の一つであろう。

「歡喜冤家序」は所引の序末に「重九日西湖漁隱題於山水隣」とある。孫目に「歡喜冤家二十四回一名貪歎報」を挙げ、明無名氏撰とある。大塚目は著編者を西湖漁隱主人とし、孫目の挙げる山水鄰原本のほかにも数種の諸本を挙げる。庭鐘の見た本は不明。

「万尊師伝」は「出啓禎野乘」とあるので、清の鄒漪『啓禎野乘』十六卷十二冊所載の一文である。国立公文書館蔵の本（二八六一二七）を見ると、第一集第七冊卷十四の三十一丁表から三十九丁表まで、九丁を用いて記されている。同書は明の天啓から崇禎年間（一六二一～四三）の人物伝で、錢謙益、薛宗、鄒漪の序がある。鄒漪自序は甲申（康熙四十三年（一七〇四））。『商船載来書目』（国立国会図書館蔵）に宝曆四甲戌（一七五四）年一部二套の記録がある。『近世崎人伝』など当代の人物総伝はあるいはこういうものにヒントを得たのかも知れない。

十

第十冊は白話語彙を中心とした手控えの単語帳ともいうべき一冊である。外題は「過目抄 十 俗呼小録 釈常談 俗考 古今諺 官職異同 説家摘要 校正傍抄正郷」。内表紙に「俗呼小録 釈常談 俗考 古今諺以上 説郭紙頁 官職異同 説家摘要

樊椒録 北国語解 升庵辞品 病榻手歌 採蘭雜志 居家必用事類全書 增戸録 蟬鏡篋筆 ○校正傍抄類書摘要 唐語訳 佩文抄有序 鄒談正音 南州異物志 教坊諸記 琵琶西廂 玉簪釈義とある。

李翊『俗呼小録』、闕名氏『釈常談』、洪邁『俗考』、楊慎『古今諺』、『留青采珍』卷十「官職古今異同」から引き、続いて、「説家摘要」と題して、王鼎『樊椒録』、楊慎『升庵辞品』、楊慎『增戸録』、戴侗『六書故』、倪綰『群談採余』、楊慎『蟬鏡篋筆』、伊藤東涯『秉燭談』、楊慎『病榻手歌』、闕名氏『採蘭雜志』、田汝成『居家必用事類全書』から引く。『留青采珍』、『六書故』、『居家必用事類全書』はそれぞれ『商船載来書目』（国立国会図書館蔵）に宝永三丙戌年一部四套、享保八癸卯年一部十本、明和二乙酉年一部八本の記録がある。

倪綰『群談採余』からは巻五「僧梵」、巻十「考証」から数条を引き、田汝成『居家必用事類全書』からは辛集卷十六「良賤孳産」中の一語を引く。『俗呼小録』、『釈常談』、『俗考』、『古今諺』、『樊椒録』、『升庵辞品』、『增戸録』、『病榻手歌』、『採蘭雜志』は陶宗儀『説郭』（および『説郭統編』）からの抄出であろう。

ただし松齋の『拙古堂日纂』に「楊慎辞品 四册全」とあるので、これは単著からの引用の可能性もある。『説郭』は『舶載書目』（宮内庁書陵部蔵）に寛延四年未四月に六部各二十套二百本の記録がある。『潜確類書』一部六套四十八本、『淵鑑類函』一部各二十套二百本も同年である。

また、「校正傍抄」と題して、璩崑玉『古今』類書纂要、蔡升元『佩文（韻府）抄』、『郷談正音』、万震『南州異物志』、崔令欽『教坊語記』、『琵琶（記）』、『西廂（記）』、『玉簪記』から語句を抽出している。『教坊語記』が『説郭』（『説郭統』）からの抄出であると思われる。『西廂記』は『西廂記釈義』第十一齣以下から十八の語句を、『玉簪記』も『玉簪記釈義』から二十三の語句を抽出している。高明『琵琶記』、王実甫『西廂記』、高濂『玉簪記』のテキストとして庭鐘は何を見たか、未考。

後半、「辛夷館急就抄 五篇 正音郷談略 近用」と記された内扉があり、「新刊増校切用正音郷談雑字大全」からの抄出がある。『正音郷談雑字大全』一名『什音全書』。唐本を見られなかったが、国立公文書館蔵の木村兼葭堂旧蔵本大本二卷二冊（三六九—五三）を見ると、天文、時令、数目、通用など各門に類別して、上下に郷談、正字を対応させた俗語辞典である。当該本には和訓が付されている。『内閣文庫蔵漢籍分類目録』は類書の扱いである。庭鐘は二十七丁を用いて写している。

十一

第十一冊は文房四宝や生花、焚香など、諸芸、物産について記事を抄出している。外題は「過目抄 十一 南曠漫抄 諸物漫抄 博物及産」。内表紙に「過目抄 十一」、その見返しに、「南曠漫抄 諸物漫抄 博物及産」、続く内扉左肩に「南曠漫抄」として、「偕老図説 四宝銘 清課 瓶花要語 放言悟語 焚香七要 徐文長清則」と内容を記す。汪光被『行厨

集』、鉛山学師費元禄纂・陳繼儒・高承挺訂校『鼉采館清課』、樞李仲遵王路『花史左編』、袁宏道『瓶史』、張丑德『瓶花譜』、王世懋『花疏』、同『瓜蔬疏』、高濂『草花譜』、冰壑夏基『隱居放言』、徐渭『徐文長秘集清則』からの抽条である。また内扉を作つて、「諸物漫抄」と左肩に記し、「海槎余録 泉南雜志 蜀都雜抄 閩書貢物、花鏡 猿猱」と記す。顧昉『海槎余録』、陳懋仁『泉南雜志』、陸深『蜀都雜抄』、『閩書』、陳湔子『花鏡』、『説文』、馬觀『瀛涯勝覽』などが引かれる。『説文』、『瀛涯勝覽』が猿や狒々の記事であり、庭鐘の小説の話題が連想される。

また、内扉を作つて、「博物及産」と左肩に記し、「博物」以下、二十二項目を抽条する。「魚尾鴟吻」、「火雞毛」、「火浣布」などは、『書隱叢説』からの抽条であるが、確かめられないものもある。

本冊に引かれた記事は、大半『説郛』（『説郛統編』）あるいは類書からからの抄出が考えられるが、『花史（左編）』などは奥田松斎『拙古堂日纂』に「花史 六本。二十四卷。題曰花史左編。樞李仲遵王路纂修」と出るので、これらも必ずしも類書によつたとはいひ切れない。同様に『隱居放言』について、松斎は「隱居放言 全合冊四本。天都夏基樂只著。富春宋維藩、价祝訂。」また「伯庵磊人。夏基著。合冊四本全」とも記している。『花鏡』についても奥田松斎『拙古堂日纂』、上田秋成『追擬花月令』に引かれる。また、『商舶載來書目』（国立国会図書館蔵）に享保四巳亥年一部一套の記録があり、和刻本（『秘伝花鏡』）がある。本書については、稿を改めて考えたい。

十二

第十二冊は庭鐘の「怪異」、「幻術」のテーマ、また『水滸伝』、『西遊記』など俗語小説への関心を示す一冊である。『書隱叢説』を中心として、『輟耕録』、『西陽雜俎』、『日知録』、『尚白齋秘笈』から抄出している。外題は「過目抄 十二 開蒙必読 伝奇踏影篇 耆婆伝一張 俗語本源」。扉が四つあり、その一に「過目抄 十二」、その二に「開蒙必読 伝奇踏影

篇稗官有本 耆婆伝一張 俗語本源」とある。その三に「開蒙必読」と題して「字有易誤読者」から「脱胎（脱胎国策）」までの十三項目を抄出するが、これは袁棟『書隠叢説』からの抽条である。その四に「伝奇踏影篇 随得加添」とあって、「稗官有本」以下、「先秦両漢詩人具備晋人清談書法（以下略）」まで、『書隠叢説』、『輟耕録』、『酉陽雜俎』、『日知録』、『尚白齋秘笈』からの抽条である。

後漢安世高訳『仏説奈女耆婆経』は、「□世時維即離国王苑中自然生一奈樹」以下、「我已得奈女与共一宿亦無奇異故如凡人如不取耳」までの百二字を写す。「俗語本源」は「随得加添」として陸游『老学庵筆記』、謝肇淛『五雜俎』、袁棟『書隠叢説』から五項目を引く。本冊についても既に翻刻があるので、詳細はそちらに譲りたい。¹⁵⁾

『書隠叢説』、『酉陽雜俎』、『尚白齋秘笈』については先述した。『輟耕録』は元の陶宗儀の筆記。和刻本がある。

十三

第十三冊は天文占卜への関心により抄出したものである。外題は「過目抄 十三 日知録 虞初新志 池北偶談 易說纂稿 河図洛書 天星集説」。見返しには「日知録略抄 虞初新志抄 池北偶談 易說纂稿 河図洛書 天星集説」とある。顧炎武『日知録』、張潮『虞初新志』、王士禎『池北偶談』の三書から、また「随得加抄」と称して、『尚白齋秘笈』、『書隠叢説』、『日知録』から抽条している。

『日知録』は内表紙に「日知録略抄」とあり、本文二丁表冒頭に「日知録 顧寧人先生著 序発端云有通儒之学有俗儒之学学将以明体適用也康熙乙亥仲秋門人潘来拜述印中潘丰」と記す。庭鐘は康熙三十四年（一六九五）呉江潘氏遂初堂刻本を見ている。奥田松斎『拙古堂日纂』では「明顧炎武寧人作号亭林二帙全」とある。和刻本は天保期に出されている。『四庫全書』子部雜家類収録。内容は後述。『四庫提要』は顧炎武の学について、「引據浩繁」なれども「牴牾」するものが少な

く、楊慎や焦竑たちが偶然に涉獵して一義の異同を得て、その一を知りてその二を知らないようなものとは違うと評す。

『虞初新志』については、内扉に「虞初新志」、同見返しに「虞初新志 自序康熙癸亥新秋心齋張潮撰／湯臨川虞初志原本未不伝作者氏号載考委託宛余篇虞初為漢武帝時小吏衣口乘輜采訪天下異聞以是各書矣」と記す。『虞初新志』は、清の張潮編の文言短編小説集。康熙癸亥二十二年（一六八三）自序。康熙三十九年刻本がある由であるが、庭鐘の見た本は不明。『商舶載來書目』（国立国会図書館蔵）宝曆十二壬午年に一部二套の記録がある。奥田松齋『拙古堂日纂』では「袖珍本十巻一帙新安張潮。山來氏輯。」と「重刊袖珍詒清堂藏板。全十冊一帙。全二十巻。」の二本を著録する。二つは乾隆庚申詒清堂重刊袖珍本のことを指すと思われる。

『池北偶談』についても内扉を設け、左肩に「池北偶談抄」と記し、次丁に五十八項目の「抄目」を掲げ、抄出本文の冒頭に「池北偶談 濟南王士禎阮亭著姪廷掄簡庵較」と記す。漁洋山人王士禎の筆記。『四庫全書』子部雜家類収録。『四庫提要』に「談古」四巻は「朝廷殊典、及び衣冠の勝事」を述べ、「談獻」六巻は「碩德、畸人、列女」に及び、「談芸」九巻は「詩文」を論じ、「談異」七巻は「神怪」を記すとし、全書の精粹は「談芸」九巻にあると評す。

奥田松齋『拙古堂日纂』では「十巻一帙濟南王士禎阮亭著康熙辛未秋漁洋山人王士禎自序」とあり、松齋は康熙辛巳（四十年（一七〇一））文粹堂刻本を著録する。松齋の明和丁亥（四年（一七六七））秋の抄書である。

十四

第十四冊は前冊に続いて顧炎武『日知録』三十二巻からの抄出である。外題は「過目抄 十四止 日知録」。前冊の末尾に、「主人曰日知録第一巻論周易多有可取他日攷易必当用此篇」とあった。『四庫提要』には、巻を追って、「経義」、「正事」、「世風」、「礼制」、「科擧」、「芸文」、「名義」、「古事真妄」、「史法」、「注書」、「雜事」、「兵及び外国事」、「天象術数」、

「地理」を論じ、また「雑考証」を為すとある。庭鐘は卷四「魯之春秋」、卷二十一「説文長箋」、同卷「説文」などからまた、卷二十七「史記」、同卷「史記註」、同卷「漢書」、同卷「漢書註」、同卷「後漢書註」、同卷「詩家註正誤」、同卷「国語註」などから「抜要」、「略語」して要文を引いている。「経義」、「注書」などが中心である。ただし全冊が『日知録』からの抽条ではなくて、『書隱叢説』の袁棟説を抄出して付け加えている。

沢田一斎『奚疑齋藏書』第三冊も全冊『日知録』の抄出である。

注

(1) 都賀庭鐘及び『過目抄』については、以下の研究を参照していただきたい。

中村幸彦「都賀庭鐘伝攷」(『中村幸彦著作集』第十一卷・漢学者記事 中央公論社、一九八二年)。水田紀久「都賀庭鐘雑攷」(『日本篆刻史論考』青裳堂書店、一九八五年)。稲田篤信・木越治「『過目抄』の研究」(富山大学教養部紀要一九卷一号、一九八六年)。同「『過目抄』の研究―第十一冊―」(富山大学教養部紀要二〇卷二号、一九八八年)。同「『過目抄』の研究―第二冊―」(富山大学教養部紀要二二卷一号、一九八九年)。木越治「翻刻『過目抄』伝奇投影篇」(稲田篤信・木越治・福田安典『都賀庭鐘・伊丹椿園集』国書刊行会、二〇〇一年)。なお、『過目抄』の冊数の数え方として、第一冊を欠冊とし、外題に合わせて現存の第一冊目(『丹鉛総録』所収冊)を第二冊として以下を数えあげて表記する。

(2) 『拙古堂日纂』と『拙古堂雜抄』の記事は、両者の記事をあわせて整理したものを『拙古堂日纂』で代表させて記している。稲田篤信「『拙古堂日纂』の研究―近世中期上方における明清書字書受容―」(本誌第三号、二〇〇八年)参照。奥田松斎については、多治比郁夫「京阪文藝史料」第一卷(青裳堂書店、二〇〇四年)参照。なお、森川竹窓『古香齋筆記』(龍谷大学図書館蔵)、沢田一斎『奚疑齋藏書』(国立国会図書館蔵)、などの同時代読書抄記、また国立国会図書館蔵本『商舶載來書目』、宮内庁書陵部蔵『舶載書目』(大庭脩編、関西大学東西學術研究所刊、一九七二年)などの舶載記録についても、適宜補記した。『古香齋筆記』には小稿で言及した書の他にも、『広東新語』、『書隱叢説』、『嶺南雜記』などの抄記がある。大坂の同時代に生きた庭鐘、松斎、竹窓の読書が共通するのを偶然ということとは出来ないような気がする。なお、『四庫全書総目提要』は原田種成『訓点本 四庫提要』子部雜家類2・類書(汲古書院、一九九三年)等を参照した。『過目抄』中の漢籍の撰者の王朝名、役割(著者・編者等)については、他書に譲った。

(3) 楊慎自序はもと『丹鉛別録』の序であったものを『丹鉛総録』に借用したものであるという。王大淳『丹鉛総録箋證』浙江古籍出版社、二〇一三年)。同書には庭鐘の写した二序のほか趙文同、汪道昆の序、楊昶の跋を付載する。

(4) 稲田篤信・木越治「『過目抄』の研究」(富山大学教養部紀要一九卷一号、一九八六年)。

- (5) 大庭脩編『船載書目』（関西大学東西學術研究所刊、一九七二年）。
- (6) 『過目抄』の研究―第二冊―（富山大学教養部紀要二二巻一号、一九八九年）。福本雅一『明末清初』（同朋社、一九八四年）。
- (7) 国立国会図書館蔵本。本書の板心には、「四百七十」といった一丁分の刻字数と思われる数字を刻す。後述屠隆『鴻苞集』にも見られる。その他『山堂肆考』、『唐詩選』（万曆癸巳跋李樊龍編選蔣一葵箋釈七巻四冊）、『忠義水滸伝』（和刻本のみ確認）にも見られる。
- (8) 神谷勝弘「浮世草子における『瑯邪代醉編』利用」（同志社国文学七十号、二〇〇九年）。
- (9) 水田紀久「都賀庭鐘雑攷」（『日本篆刻史論考』（青裳堂書店、一九八五年）。中村幸彦「都賀庭鐘伝攷」（『中村幸彦著述集』第十一巻、中央公論社、一九八二年）には、『瑯邪代醉編』を貸してくれた香川南洋は一本堂香川修庵の甥で、庭鐘に一歳の年長であり、京都嵐山二尊院墓域に都賀庭鐘の手跡になる墓碑が残るとも指摘がある。伊藤仁斎の墓のある所である。
- (10) 『過目抄』には庭鐘が漢籍から抽条抄出する際に、本文の近傍や末尾に自身の校語、批語を書き加えている。数量的にはそれほど多くないが、一字の字句訂正、数語の補足、自身の意見など、その性質はさまざまである。この内には、「主人」、「鐘曰」、「巢居曰」など庭鐘を主語とするものがある。ここは第六冊三丁オ、および十一丁ウの書き込みである。後者の一文は「鐘曰」で始まる。既に諸家に引かれている。
- (11) 庭鐘の学芸についての近年の研究は、福田安典『平賀源内の研究 大坂篇 源内と上方学界』（ぺりかん社、二〇〇三年）が有益である。
- (12) 大塚秀高『増補中国通俗小説書目』（汲古書院、一九八七年）。
- (13) 梅木幸吉『佐伯文庫の蔵書目』（私家版、一九七四年）。同『佐伯文庫の残存本』（私家版、一九八三年）。
- (14) 孫楷第『中国通俗小説書目』（人民文学出版社、一九八二年）。
- (15) 注(13)に同じ。
- (16) 注(1)参照。

付記一 小稿は平成二十六年年度科学研究費補助金基盤研究（C）「和刻本漢籍における近世中期の通俗的注釈書の研究」の成果の一部である。

付記二 『過目抄』については、一九八五年七月二十九日、畏友太田登氏（天理大学名誉教授）の誘掖で披見したのが初見である。その後、進展に乏しく、今回も私の力不足から得られた成果は推測の近似値に止まったくらいがあるが、あらためて学恩を謝したい。

付記三 小稿の初稿が出た段階で、劉菲菲氏の「都賀庭鐘の読書筆記『過目抄』とその読本創作」（絵入本科研ワークシヨップ 二〇一四年三月六日 於国文学研究資料館）の存在を知り、同氏にお願いして発表資料を披見した。そこには小稿が気づいていない有益な指摘があるが、今回は印刷上の制約があつて、生かすことが出来なかつた。後日に期したく、諒とせられたい。劉菲菲氏に御礼申し上げます。

【キーワード】
・ 都賀庭鐘
・ 過目抄
・ 明清漢籍
・ 読書抄記
・ 奥田松斎